

知床と私

相談役 丹保 憲仁

(北海道立総合研究所理事長、北海道大学名誉教授:15代総長、放送大学名誉教授:5代学長)

知床連山の稜線で

最初に知床を訪れたのは昭和34年の夏であったかと思う。地球化学会の知床巡検で、北大の仲間が巡視船と漁船で半島を回って勉強するという企てがあった。その漁船に北大職員山岳会の仲間5人と便乗させてもらって、夜中に網走を出港し夜明けにカムイワッカの番屋で下してもらい、20kgものキスリング・ザックをしょって船酔いに苛まれたまま竹梯子で滝の横を高台まで這い上る。今の観光道路の末端である。当時は道路などないから海からカムイワッカ川に至る唯一の方法である。温泉なめ滝の岩盤を越えて、這松の密集する尾根にとりつき硫黄山(1562m)の山頂を目指す終日の這松こぎが始まる。リーダーは2年先輩の北大山岳OBの新妻徹さんで、女性一人と駆け出しの工学部助教授の小生を含む5人組である。這松の枝に引っかかるザックを無理矢理ひきだして松の枝渡りをする事数時間、この間地面に降り立つことなくひたすら稜線を目指す。夕刻に硫黄山火口間の鞍部にテントを張る。夜中に低気圧の余波が尾根を通過して、冷たい雨嵐となり、テントの索と杭の維持のために外に出て、ずぶぬれとなって凍死寸前の寒さを味わいながら漸く朝を迎える。

次の日は、台風一過快晴の初夏の稜線である。二つ池をすぎ、オッカバケ山を越え、サシルイ岳を過ぎ、三峰を正面に見てひたすらにまっすぐに羅臼岳に向かう。前日の這松こぎ渡りと嵐の夜と打って変わった、お花畑と淡々たる尾根道の楽しさは、その数年前に学生の頃、大雪の高根が原でウスバキ蝶などの学術標本採集を手伝って数日を駆け回って以来の楽しい尾根歩きであった。戦に敗れて10年少しのこの時期、すぐの眼下に国後の海岸線を見続けるのは、なんとも悔しいことであった。口バクチクという雷管を仕込んだ、熊取の仕掛けが有るから気をつけると聞いていたが、それらしきものも熊にも会

わず夕暮れ近く羅臼平に着き、荷を置いて山頂によじ登る。夕暮れの雲がわいてきて、落日が我々の影を雲に映し、その周りに後光が差している。ブロッケン妖怪である。ブロッケン現象に会うとその人はその後遭難しないという言い伝えが有る。おかげで80歳まで、山で死ぬこともなく元気で生きてきた。

下り始めるころとっぴりと日が暮れて、代わりに皓皓たる満月が山を照らす。青い月光に照らされて深夜を麓まで降ることにする。最後尾を歩いていた小生は、道の曲がり毎に熊の臭いを感じて少々恐ろしかった。3日間知床の稜線にいて、人にも熊にも会うことなく午前3時頃羅臼温泉につく。こんな夜中に非常識な事と温泉の親父さんに叱られたうえで、泊めて貰う。標津までバスで出て、列車で帰る。幸せな知床との出会いである。

知床大学院大学を作るという話

それから50年も経って、知床博物館の中川・元館長から大学院を作りたいから手伝って欲しいという話が、上野さん帯同である。中川さんの博識と小さいがすばらしい活動をしている知床博物館の発展系として、お手伝いせねばなるまい。大泰司名誉教授が尽力していると伺った。小生が北大総長の時に構内にリスを走らせる計画に支援頂いたお礼をせねばなるまい。文科省の大学設置法人審議会会長や、大学基準協会会長、国立大学評価委員会委員長などを長らく務めたノウハウと人脈をお役に立てられるかもしれないと思ってお手伝いすることにした。専門職大学院の制度は小生が審議会長の時作ったもので、小さな特徴ある専門家養成プログラムを知床に作る事には大いに賛成である。近隣/近似の大学と関係をもってプログラムを孤立させないようにすればよい。近隣に小生が理事長を勤めている道立総合研究機構の生命系のいくつもの研究所もある。是非一緒に知床学を作り上げる仲間に加えて頂きたい。